
花の妖怪

日陰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の妖怪

【Nコード】

N6870N

【作者名】

日陰

【あらすじ】

極一般的社会人の私が何故かタイムマシンの実験台（生贄）にされた。

まあ適当に自給自足しますか。と言うお話？

プロローグ、全ては此処から（前書き）

この作者は幽香大好きです。

とても、ええそれはもう。

なので幽香は俺の嫁と言う人はUターン推奨します。

原作は遠いです、はい。

それでは逝きます。

プロローグ、全ては此処から

side 風見××

唯、運が悪かった、としか言えない。

その日3日徹夜して睡魔が酷かったのも、今日の血液型占いと星座占いが両方最下位だったのも今思えば全て今日は何もせずに家に籠れと言う神のお告げだったのかも知れないが今となっては後の祭、全てが手遅れである。

私は大人で、大人の殆どが会社に行き働いている。私もその例に漏れず会社へ行こうと玄関の戸を開けた所で馬鹿に出会った。正直に言おう最悪だ。

この馬鹿は頭のネジが百本位抜け落ち残りのネジの穴が馬鹿になっているのではないかと、疑問に思う程常識が無いのだ。

しかし、コイツは世間では天才と言われる人種だ。コイツのお蔭で技術は200年程進んだとされている、がコイツはその知識を録な事に使わない。

この前でさえ人工的にスキマを作るのに成功した、と言って来た。スキマなる物が何か私は知らないのだが少し危険な予感がしたので早急に止めるように指示した。

捨てられた仔犬のような眼で見てきたが心を鬼にして命令した。

その後家で何故か変な中華と洋風が混ざった服を着た女性に感謝された。

私の家にいつの間に入ったのだろう。

おっと、話が脱線したな。

つまり、私が何を言いたいのかと言うとそいつが何かをすると必ず予想外の何かが起こるのだ。……………周り（私）を巻き込んで。

「今日は一体なんだ」

「冷たい、冷たいよ『外に置いて絶対溶けない氷ただし、辺りは絶対零度』みたいな？」

「今日は一体何の用だ？」

コイツのボケはよく解らないが解らない方が良いと本能が言っているので無視する。

「××。あんまり怒っていると寿命が縮むぞ」

「お前のせいだ。」

それと私は今から健全なそこらの社会人のように会社に行くのだが？」

「そこらへんは大丈夫。もう会社に連絡して許可を得ている」

こいつの迷惑な事はいつは1000年に一度現れるかどうかの天才ということと、今までの功績でかなりの権力が集中していることだ。

今までの歴史で馬鹿が権力を持ったら録な事にならないのは分かっているだろうに。

「タイムマシンを作ったんだ」

.....。

「タイムマシンを、作ったんだが」

「分かった、その先を言うな簡単に想像できる。」

そして答えはNOだ」

そう答えて家に戻ろうとすると肩を捕まれた。

「何をする。」

私は何処かの馬鹿が会社に休む、と連絡していたのでその連絡通りに休もうとしているのだが？

用が無いならとっととその私の肩を掴んで離さない手を離し今すぐ回れ右をしてどこぞなりと失せるがいいさ、おっと、泣くなら別の、私の部屋でない場所で泣くと良い。」

おい、こら、入るなと、言っただろう。」

無理矢理、部屋に上がり込もうとした不屈き者の肩を掴みこちらへ向かせるが、下を向いているせいで肝心の顔が見えないが肩が震えているので多分泣いて居るのだらうと、当たりをつける。

「私が悪かったから泣き止んでくれ」

この鳴き声を聞いて胸が締め付けられる様に痛む事で再確認する。私はこいつが大切みたいだ。

しかし、何故か思い出せない記憶が震えて警告している。

「それじゃ」

「余りの無茶しないならな」

「大丈夫。××なら大丈夫と信じているから」

と、此所まで言われてふと気が付いた。
もしかして嵌められた？

「ちょっと、ま」

「過去のツアーに1名様ご案内」

と言う言葉と同時に意識が黒くなり。

最後に見たあいつの顔は思わず殴りたくなるくらい笑顔だった。

こいつ、さっき泣いて無い笑いを堪えていたんだ。と、そこまで考えた所で意識が墜ちた。

鬼と花（前書き）

行きなりオリキャラが。
後、幽香成分が少ない。

感想批判カモンです。

鬼と花

side 風見

風が顔を撫でる。

太陽がその日差しで肌をジリジリと、焼いていく熱で目が覚めた。

辺りを見ると見渡しが非常に良い草原だった。自然が残っているところで昼寝をしたら最高だろう。但し此処が何処だか解ればの話だが。流石に獣が出るかも知れない場所でもう一度寝るのは気が引けた。

もう一度当たりを見渡して見ると足下に一枚の紙切れがあった。

「ふむ、なにになに」

あいつからの手紙らしい。

『この紙切れを読んで居るという事は無事についた様だね。
まずは君の手首を見てほしい』

ちら、と見てみると黒い石で出来たブレスレットがしてあった。

「なんだこれ？」

『このブレスレットは君がどの時間帯と次元に居るのか解る発信器の様な物だから無くさない様に。』

一応こちらで発見できしだい戻せるよう努力する。君の会社には僕の権力で有給にしたから安心して自給自足しといて♪』

「……………」

一応趣味として家庭菜園を作っているし親がサバイバル好きで何回か付いていった事により自給自足ならできるが心の何処が少々イヤッとし、破ろうとしてみたが破れず何故か只の紙切れのはずなのに伸び破れなかった。

『一応書いておくけどこの紙切れは特殊繊維を使っているから破れないし燃えない、水にもふやけないという夢の素材なんだ。まあ半分、暗黒物質ダークマターを使ってるからね♪』

あの馬鹿はとうとう架空の物質まで使い始めたか。

『それと多分だけどタイムマシンで君を過去に飛ばしたんだけど一回完全に身体全部を粒子にしたから再構成の際に細部が変わってるかも知れないのはご愛嬌ということで許してね♪』

よし。戻ったら仕返しだな。暫く飯は作らないでおこう。

何故錯乱しない、と聞かれたら。戻れない、とは思わないからだ。あいつはとびきりの天才で、友達だから。

念のため身体を少し見たが変わった部分は無いみたいだ。鏡が無いから細かい所は解らないが。

『あと、ブレスレットには通話機能がついてるからこっちの機械で発見次第連絡するから』

通話機能か、なら退屈する事はなさそうだな。

『P・S・過去には妖怪と言う化け物がいるらしいから気をつけて
愛しの友人より』

そこまで読み終えて辺りが暗いのに気が付いた。

空はまだ太陽が出ている。

此処は障害物の無い草原。

そこまで考え一つの可能性に出会った。

最後に書いてあった『妖怪』という存在。

普通なら馬鹿馬鹿しいと笑うだろう。

しかし、あいつは頭のネジが無くなっていたりするが無駄な事はし
ないと言うのは私が身を持って知ってる。

そして後ろに気配を感じる。

分かりやすく言おう。

後ろに誰がいる。

ゆっくり後ろを振り返るとそこにはとても大きい何かがあった。

一応意思の疎通を出来るかも、と思い試してみる。

「貴方は誰だ？」

少し待ったがやはり意思の疎通は不可能だったかと思いつつ、
考えていたら上から大きな声が聞こえた。

「儂はこの近くの縄張りの主をしている鬼の羅刹だ。
貴女は誰かね？」

……………。

おっと、余りにも予想外の対応にびっくりした。

外形は化け物だが物腰は以外と紳士だ。

「失礼、羅刹さん。
私の名は風見。」

それでこの只の風見に何の用かしら？」

一応この辺りの主と言える位の实力者が何故このような場所に来ているのだろう。

と言う簡単な好奇心からの質問を試みる。あわよくば、此処がどこか、という事も聞き出せれば万歳だ。

まあ、もし食べる為に襲って来たら逃げよう。

「儂は、此処に見慣れぬ者が居たから来たに過ぎん。
所で風見よ、もし行くところが無いなら儂の所にくるか？」

急に願っても無い提案がきたが妖怪は人を食べる。……らしい。
実際見ていないので何とも言えないがこの巨体なら人を食べれそう
だ。

「私を食べるつもりですか？」

「否、他はどうか知らぬが少なくとも儂と部下は人を食べぬ。
我等が食べるのは、人による我等への恐れ、恐怖と言った感情だ」

「それでは何故私を家へ？」

「それはな、風見。
お前の目だ。」

帰る場所はあるが帰れない。そんな目をしていた」

帰る場所に帰れない、か。

胸の中であいつの顔を思い出す。

「ふう、私を食べないのであれば行きましょう」

「鬼は嘘を嫌う。」

風見の安全は保証しよう」

「それでは貴方の家まで案内よろしく。羅刹」

「任せられた。」

これで儂の部下のむさ苦しい所から開放されるな」

「あら、そっちが本音なの？」

「否、両方本音さ風見」

花と鬼（前書き）

やっと携帯復帰＋怪我少し治療＋鬱回復です。

長かった。

まあたのしんでください。

花と鬼

side 羅刹

それは儂が部下達と酒を飲み交わしていた時だった。

儂がちょうど酒を飲もうとする瞬間【それ】は現れた。

妖力の欠片も感じさせず儂の縄張りに侵入したであろう【それ】は、ある場所で暴力的なまでの大きさの妖力を放出している。しかもその場所は儂が居る場所からさほど離れておらず、これから考えられることは、相手がかかなり隠密性に優れているか、転移してきたのか、新しくこの世界に産まれたかの三つだが、三つ目はかなり低いのでその可能性は考え無くてよいだろう。

「これは喧嘩の誘いか？」

それ以外に考えられなくも無いがこの辺りは儂の縄張りと言う事は例え神や悪魔、果ては妖精でさえも知ってる事実。

しかしながらこの場所は霊的にとても優れている場所で、妖怪や神、悪魔にとってはまさに喉から手が出るほど欲しい垂涎の場所なので力を持った大妖怪や好戦的な神、悪魔によく狙われたが最初の何十年か返り討ちにしていたが最近は静かになった。と思ったのだが、ここまで堂々と挑発紛いの事をしてくる相手は久し振りだ、久し振りに血が騒ぐ。

妖気があるからと言って相手が妖怪であるとは限らない事は経験で知ってる。

さて相手は神か悪魔か果ては大妖怪か。

早まる心を落ち着けながら言う。

「久し振りの喧嘩のお誘いかもしれん。儂が直々に向かおう」

重い腰を上げ向かうとすると部下に止められた。

「羅刹様、無礼を承知で言わせて頂きます。

これはあからさまな罠です。

ここ最近戦争が小競り合いから大規模化してきています。恐らくどちらかの軍勢がこの土地を欲して放った刺客と言う可能性がります。

わざわざ羅刹様が出向かなくとも我等が排除致します」

【戦争】、だ。

今この世界は二つの世界の戦場になっている。

天界と魔界。

神と魔王。

天使と悪魔。

二つの勢力がこの世界で争っている。

理由はこの世界は二つの世界を繋ぐ橋になって居るからだ。どちらかの世界に行くためには必ずこの世界を通る必要がある。

この世界にとっては良い迷惑なのだが、何も害だけでは無い。彼等の死体はその場に残らず空気に溶け、その土地に影響を与える。悪魔や魔王の死体は妖怪に天使や神の死体は人間に影響をもたらす。生きていても人間に力を与えるが人間にはその力に耐えきれないがたまに耐えきれぬ人間が存在しその人間の事を周りが英雄と呼んだりする。

さて戻すが、元々この土地の地下には龍脈があったが、色々と合わせり莫大な効果を表し、出来上がったのがこの土地だ。しかもこの

土地は神と魔王の死体が何体か倒れた事があり何がどう組み合わせたのか人間にも妖怪にも果ては神や魔王にまで益がある土地になってしまった。そのお蔭で全てに狙われるのだが、儂や部下が全て追いついている。

普通の妖怪なら神や魔王等に太刀打ち出来ないのだが、儂らの種族は鬼。

鬼と言う種族は皆が強力で一騎当千の否、一騎当万の強者ばかりだが、しかし、それは正面から戦った場合だ。皆、もちろん儂も含められるが鬼と言う種族は誠実を好み嘘を嫌う。

それはこの鬼と言う種族の良い所であり悪い所でもある。

将来それが悪い方に向かなければ良いのだが。

「……………。…刹…。羅刹様！」

「どうした？」

少し思考に没頭し過ぎたな。

「だから、ここは我等に任せて下さい。
これは明らかな罠です」

たしかに部下の言う事は最もだ、此所まで堂々としていると罠かも知れない。だが。

「すると何か。

お前は、この儂が売られた喧嘩を買わず、罠だと言う理由で自分の子を自分の身の安全を優先し、死地かも知れん場所に笑って送り出せる様な精神をしていると？」

おいおい、お前らの親は何時からそんな腰抜けになった？

この儂はそこまで弱くないぞ？

それとも儂を馬鹿にしているのか!!」

自らの子を望んで死地に出す親が居ようか？

答えは否だ。

儂は鬼であり、コイツらの親でもある、死地に行くのは一人で十分で元より死ぬ積もりは更々ない。

「そう心配するな。

儂が帰る頃には宴の準備をしておけよ？」

「はい。」

……母上」

さて息子の期待に答えるとするか。



儂が行った先に見たのは一人の妖怪だった。

始めは感じなかったが、近付くにつれてその妖怪の異常性が分かる。

この妖怪の妖力が大きいのに揺れが大きい過ぎるのだ。

妖怪が妖力を上げる為には長い年月生きる事が一般的だが玉に馬鹿高い妖力を持ったり危ない能力、と言った先天的な事をしているかも知れん。

普通の妖怪の妖力、否、妖力だけではなく、霊力、神力も力の揺れるが、小さい揺れしか起こらない力の制御の仕方は本能レベルで分かるからだ。

しかし、この妖怪の揺れは激しい。

まるで押さえ方を知らない様な。当たり前前の事を知らない。まるで生まれたての赤ん坊のような……………。

もしかして、コイツは新しく生まれた妖怪か？！

そんな事は何十年ぶりだろうか、息子らを呼ぶべきだろう「貴方は誰だ」

思考が固まった。

完全に妖力を押さえている儂に気が付くとは。

それと、先程まで不安定だった妖力が儂を見つけた途端に妖力を押さえつけ始めた。

儂の押さえた妖力を見てそれを模倣する天才的な才能、生まれたばかりなのに本能に負けない理性。

コイツは正に何千年に一人の天才だろう。

その様に考えていたら段々とその妖怪の顔が訝しげに変わってきた。

一応質問に答えていると、コイツ、否、風見が生まれた妖怪では無いと気付いた。

風見を観察していると行動の所々で誰かもう一人居る様な素振りを見せ、その人物が居ない事に気が付き、少し目を伏せ、そして直ぐ

に元の調子に治る。

その繰り返した。

これは捨てられたか、逃がされたかのどちらかな。

風見が、どこで生きていて、どこで生活し、どのようにその隣の誰かと過ごしていたかは知らないが、責めてこの土地に居る間は私が母として接し、風見の支えとなろう。

と、家に着いた様だな、騒ぎが離れた此所まで聞こえてくる。

その騒ぎの鬼が儂を見て少し驚いた顔をする。

少し考え儂は能力で姿を変えていたということを出して解除すると同時に風見の方を見ると、今まで余り崩れ無かった表情が少し驚きに染まっているのを確認し、言葉を紡ぐ。

「我が家へようこそ風見」

花の異変（前書き）

短いですがそれでも良いと言う人はどうぞ

花の異変

side 風見

あれからここは何処なのか、等と言った質問をして歩いていたのだが、一つ困った事があったのだ。

それは、余りにも羅刹と私の歩幅に差が在りすぎた事だ。

私の身長が175なのだが、羅刹は私から見たら約五倍あるから、約八メートルある事になるが、下を見ると羅刹の影が約二メートル辺りで止まっている。

なんという巨人、もとい、巨鬼と思っていたら見栄を張っていただけの鬼だ、と思ったが、普通に二メートルもあればかなりの背の高さであるが私と歩幅が余り変わらない筈である。

そんな考えをしているとかなり大きな屋敷が目の前に広がった。

何かその屋敷は騒がしくなっておりまるでお祭り騒ぎだ、少し見ていると、その中から一人の角が生えた男性が出てきた。

え。

目を擦る。

もう一度擦る。

駄目だ目の前に居る幻想は消えない。

私がプチ混乱している間に羅刹がその男性に近づき何か話をして
いる。

話が終わったのか羅刹がこちらへ来た。

「あら、羅刹ど」

うしたの。まで言えなかった。

行きなり羅刹の身体からポン、というケミカルな音と煙が出てきた。

何処から音が、とか、羅刹を覆う煙は何処に隠していた、なんて疑

問は、晴れた煙の中にいた人物を見た時点で消えた。

段々と晴れていく煙。

その中に正に絶世の美女が居た。

私には分からないが、男性が抱く、理想の女性を具現化した様なスタイル。

擬音にするなら、ボン、キュ、ボン。

その胸の脂肪が憎い！！

はっ、生命の神秘と神の気まぐれに憎悪して意識がダークサイドに傾く所だった。

と言うかあんなビフォーアフターは認め無い。

別人、という可能性に賭、羅刹？の方を見ると、こっちを見て。

「我が家へようこそ風見」

アウトー。

はい、アウト——！！！！

何であのようなビフォーアフターがある、と思って居ると何故か頬に衝撃を感じた。

少し辺りを見ると羅刹が横になっている？否、私が横に倒れて居るのかと、頬に感じる地面の感覚を感じながら意識が闇に染まった。

花の異変（後書き）

次の更新はテスト後になるから遅れるかもしれないです。

風見「何時もの事でしょう？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6870n/>

花の妖怪

2010年11月27日20時39分発行